

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	ベルツのいれずみ : いれずみは着物である (いれずみ物語 ; 25)
Author(s)	小野, 友道
Citation	大塚薬報 = Otsukayakuho, 636: 43-45
Issue date	2008-06-10
Type	Journal Article
URL	http://hdl.handle.net/2298/8752
Right	



いれずみ物語

— 25 —

小野 友道

ベルツのいれずみ — いれずみは着物である —

エルフィン・フォン・ベルツ Erwin von Baelz は明治9年、27歳時に来日、29年間で日本で過ごした。日本での功績は、東京大学で内科学・生理学などを通じて多くの医学者・医者を育成したにとどまらず、ツツガムシ病の研究、蒙古斑、そして有名な草津での温泉療法などさまざまな研究業績があるが、一方で、狐憑き、歌舞伎などへの興味も強く、日本大好きとなり、奥さんもまた日本人、花さんである。「君により日本医学の花ひらく」と医者で俳人の水原秋桜子が謳ったとおり、日本近代医学の恩人である。そのベルツが日本に来て驚いたのは、赤ちゃんのお尻の青いことであった。まさか、この青い痣、いれずみと思ったわけではないだろうが、蒙古民族の特徴だとして、Mongolenfleck（蒙古人斑）と命名した。これが蒙古斑に関する初めての学術論文となり、西洋に蒙古斑が知られるようになった。さらにベルツがもっと驚いたのは、民衆がまだいれずみをしていることであったという。それでいれずみについても論文を残している。この論文（1883年）「Die Körperlichen Eigenschaften der Japner. Ein an Throperlichen Studie」を高く評価して、

安川徳太郎の訳で紹介している礫川の本から引用してみる。ベルツは「日本人がいれずみをする目的は、他の人種とちがっているのであろうか。これにたいして、わたくしは、日本人のいれずみは着物であると答えたい。その証明として。わたくしは、つぎの4つの理由をあげておく」として、(1)日本人の職人の着物は紺色の綿入れ法被^{はっぴ}で、時にはモモヒキで、いれずみはこの服装でかくされた部位に施されていること、(2)職人の中でも駕籠かき、飛脚、人足など力仕事や汗をたくさんかく仕事で、裸にならねばならない職人がいれずみをしている。それも、裸がみつともないといわれる都会の者に限られている。いれずみで着物をきてるように見せている。(3)いれずみの色は、着物の色と同じ濃い藍色である。(4)いれずみの大きさは、火消しを兼ねる仕事師の着物にちょうど一致していること、を挙げた。そしてある人に「『都会や国道沿いに住んでいる、あるきまった身分の人だけがいれずみをしているのは、どういうわけですか』とたずねてみたら、この人は、『着物がないときは、せめて肉じゅばんでもつけていなければ、男の恥でござんす』と答えた。日



Nuva - Hivaのいれずみを
された頭と肩（1920年、マ
ルケサス諸島）
あたかも衣服をまとっている
ように見える。
（『Decorated Skin A World
Survey of Body Art』より転載）

本政府が着物をきることを法律で強制したこんにち、日本のいれずみは、そのもとの意味をなくしてしまったのである」と指摘した。また、いれずみを通して、庶民階級が南方系であることなどを記載したこのベルツの論文が詳しく紹介されていないことに、礫川は憤まんやるかたないが、和歌森太郎のベルツに批判的な見解の論文も紹介している。

ベルツの南方系説と言え、例えば『Decorated Skin A World Survey of Body Art』で、南方のいれずみを見るがよい。Marquesas島のいれずみの説明には「Sometimes an attempt was even made to imitate to European closing in the tattoo patterns」とある。さらに、パンツそのもののようないれずみも Samoaなどで多くみられる。

寺田は「衣服の発達、……寒暑雨雪等の自然的要求から起こるものと、装飾儀礼からの社会的要素から起こる……」とし、「従って衣服が自然的要求から用ひられる必要の少ない個処、例えば熱帯地方のやうに、裸体生活を以って生活し得られる個処であると、衣服の複雑な形式を案出する前に、先ず肉体其のものに向か

って装飾の試みられ……」と、つまり肉体装飾は衣服の役割の一つの重要な部分を担っているのである。

*

いれずみの衣服説は、ベルツ以外にもある。玉林は「臥煙は職業上、ほとんど六尺褌一本の暮らしであった。真冬でも衣服をまとわないのが誇りであり、彫り物がいわば衣服でもあった」と、威勢と粋、それに男伊達の面から、それが衣服であることを指摘した。一方で「まといでも振った時に、ちらっと彫り物が見えるのがいい」と江戸消防隊員が述べている（山本芳美『イレズミの世界』）点も重要である。それは江戸の庶民の男が、着物の裏に金をかけるのと軌を一にしているのではないか。松田が日本のいれずみを、「秘匿と顕示」「自己開示であるとともに自己閉鎖であること」と見事に表現しているが、いざというときに開き直ってみせる啖呵であろうか。この点で衣装の裏といれずみは同じではないか。坪井は「庶民の間に好まれた刺青は、彫り物といって、全身をくまなくおおうのを誇りとしていた。しかもそのテーマは、たいてい文学的なテーマ、軍記物や武勇

伝から取材したものをういていた。それは、衣服の文様がしばしば『源氏物語』や『伊勢物語』からテーマを選び、それを象徴化したものが使われたのと軌を一にしていた。こうした全身をくまなくおおう彫り物は、いわば皮膚化された衣服である。それは身体の立体的な差を誇示するものではなく、皮膚の表面がいかに華やかであるかを誇示するもので、衣服と同じ意味であった」と述べている。

*

ところで衣装・衣服とは何なのだろうか。

「いうまでもなく人間の皮膚の働きの不備を補うために出来たものです。……衣装は本当に魔物です。人間が生きているのではなく、衣装が生活しているのではないかとさえ思われます。女の人が、そんなにまでも美しい衣装をと願うのも、そのためなのではないでしょうか。出来ることなら、衣装を皮膚の中にまで浸透させようと、お化粧に浮身をやつすのです」

これは安部公房の『飢えた皮膚』の一節である。いれずみには直接言及していないが、化粧を男のいれずみと読み直せるのではないか。また、その他にも「衣服は第二の皮膚」、「衣服は皮膚、皮膚は衣服」、「衣服は着たり脱いだりされる皮膚」、あるいは「社会の生きた皮膚としてのファッション」などと指摘されている。

「ベッドで何を身につけているかと訊かれたマリリン・モンローが＜シャネルの五番よ＞と答えたエピソードは、人間という存在はたとえ衣服を身につけていなくとも何らかの仕方での身を飾り装うものであることを物語っている。人類学者によれば、衣服とは人間が社会の中で生活を営む上での基本的な要素であり、これまでに知られている人間のあらゆる文化においてこのことは共通の事実であるとされる。あらゆる人びとは衣服やタトゥー、化粧、さらには他の種類のボディ・ペインティングといったように、何らかを付け加え、装いを施し、引き立たせ、飾りつける。……衣服や装飾品が身

体を社会化し身体に意味やアイデンティティーを付与する手段のひとつであるという事実を、衣服が帯びている偏在的性質というものが物語っているように思われる」

そう、まさにいれずみは衣服である。

鷺田は＜像＞としての身体こそ＜わたし＞が身にまとう第一の衣服であるとしたフランスの精神分析学者 E.ルモワヌ・ルッチオーニを踏まえて、「ぼくの身体でぼくがじかに見たり触れたりして確認できるのは、つねにその断片でしかない」とすると、このぼくの身体って離れて見ればこんなふうに見えるんだろうな……という創造のなかでしか、ぼくの身体はその全体像をあらわさないと言っていいはずだ。つまり、ぼくの身体とはぼくが想像するもの、つまり、＜像＞でしかありえないことになる」とし、「したがってそういう＜像＞としての身体のシュミレーションという点では衣服と刺青は本質的に差異はない」と述べている。さらに、「衣服も刺青も、かつて、＜魂の衣＞としてあった。衣服と刺青は、視覚的なものとして外側からプリントされるのではなく、むしろぼくらの存在の内側から外へ向かってプリントされたものだった」と指摘している。

皮膚が第一の衣服 衣服は第二の皮膚とすれば、モローが描いた「刺青のサロメ」の俗称で呼ばれる「ヘロデ王のまえで踊るサロメ」のその裸身の全面にからみつく植物文様、怪物文様の空想のアラベスクこそ第二の皮膚、理想のいれずみ、理想の衣服かもしれない。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

- 小野友道：医療今昔物語 123。蒙古斑、臨床科学 34；1695, 1988.
- ジョアン・エントウイスル（鈴木信雄監訳）：『ファッションと身体』日本経済論評社, 2005.
- 玉林晴朗：『分身百姿』, 日本刺青研究所, 1987.
- 坪井洋文：『家と女性＝暮らしの文化』, 小学館, 1995.
- 寺田精一：文身研究の興味, 『刺青の民俗学』
- 日本アート・センター：『モロー 新潮社美術文庫35』, 新潮社, 1975.
- 松田 修：『刺青・性・死』, 平凡社, 1972.
- 鷺田清一：『ひととはなぜ服を着るのか』, 日本放送協会, 1998.
- 鷺田清一：『ちぐはぐな身体』, 筑摩書房, 2005.